

佑 啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

今は昔、昔も今も

松橋 達也

自宅より満二十一歳を迎えた愛車ミラを走らせることわずか三分。「ケンケン」「ポーホケキョ」「チュン、チュン」自然の中にある施設は鳥たちの鳴き声で朝を迎えている。ホームの電子音やスマホの電磁波を体に浴びながら満員電車で揺られ、長時間通勤をしている方も多い中、なんと恵まれた朝の通勤か。

この四月、千葉県社会福祉事業団が運営していた「アドバンスながうら」(旧ながうらワークホーム)の機能を引継ぎ、開所した「ふる里学舎蔵波」。施設長として赴任し、早二ヶ月が経過した。気がつけば桜はとくに散り去り、若葉も新緑を通り越し、深緑に変わつていく。例年この時期は何かと忙しいので、季節の移ろいを感じる余裕がないのも確かだが、今年は別格だった。ここにきてようやく、自然の声に気づく心の余裕が生まれた。

ころがどうだろう。利用者が熱を出したと報告を受ければなんか悪い病気がかかってしまったのではないかと心配し、若い職員が遅番を終え暗い夜道を帰るとなれば事故を起こしやしないかと、これまた心配。朝から晩まで様々な心配に支配される始末。「まあいいか。なんとかなるさ。」究極のいい加減・楽天的志向でとおしてきただけで自分とは全く違う自分が存在していることに嫌悪感さえ覚えた。そんな日々が続いたある晩、寝酒に酔った杯飲んだ後の布団の中で、里見理事長の顔がふと浮かんだ。理事長は自分より六つも若い三十九歳のときに六十名を預かる入所施設の施設長になり、このような重責を担ってきた。今では千名を超える利用者とその家族や、職員、家族も含めれば一体何人を守る立場にあるのか。少し気が遠くなり目が冴えてしまった。

その後、眠れずにしばらく悶々としていたが、理事長のこんな言葉を思い出した。「自分の持っている能力をサボらず發揮していれば人は認めてくれる。安心しろ。思い切つてやつて何かあっても必ず俺と法人がバックアップするから心配するな。」よく考えると、いろいろな方から「千葉県内はもとより全国からも注目されているよ。大変だけど頑張つて」と声をかけられ、大黒柱としてしつかりやらねばと必要以上に肩に力が入っていたのかも知れない。「そうだ、自分なりにサボらず懸命にやればいいんだ。しかも、自分ひとりでではない。共に働く職員もいるし、佑啓会には頼りになる先輩が沢山いるんだ。」と肩の力が抜けた。

しかし、まさか自分がこの蔵波の地に勤務するとは思わなかった。私の生まれ育った家は、ふる里学舎蔵波から自転車ですぐ通れる場所にある。幼少期はよく近くにある堰でのブラックバス釣りやカブトムシ捕りのため、袖ヶ浦福祉センター授産所と呼ばれていたこの地に通った。そしてそのたびに少し心臓がドキドキしていたのを思い出す。なぜ、ドキドキしたのか。デカイ赤カブトを捕まえた姿や、大きなブラックバスを釣り上げた姿を想像していたのではない。若いお母さんが赤ちゃんにおっぱいを飲ませてくれる姿を想像していたからである。そう、授産所とは訳あって帰る場所のない若いお母さんがお産をし、おっぱいを飲ませるための施設だと思つてた。



今から二十五年前。大学を中退後、住所不定、無職となり都内や横浜の繁華街を彷徨つてた。訳あつてうちひしがれたまま地元に戻つてた時、たまたま目にした千葉県社会福祉事業団袖ヶ浦福祉センターのバス後部窓に貼られた一枚のチラシを目にしたことから福祉の道に入るこ

とになった。今と同様、福祉を志す若者がおらず、極端な人手不足だつた。結果合格、養育園に配属された。その後の新任職員研修で初めて授産所が知的に障害がある方の訓練の場だと知った。その養育園で出会った里見理事長に拾われ、育てられ、様々な良き出会いと紆余曲折、巡り会わせを経て、今この地で仕事をさせていただいているという現実。縁を感じずにはいられない。そして、つくづく思う。人生本当に何があるかわからない。

この二十五年で蔵波を取り巻く景色は大きく変わった。当時の授産所は少しさびしげな色合いの古びた建物だったが、市原の学舎が建設された二年後、平成七年に「ながうらワークホーム」として建て替えられた。当時見学をさせていただく機会があつたのだが、なんと近代的で立派な建物だろうと衝撃を受けたのを思い出す。施設の近くには館山自動車道のインターも出来た。そして、カブトムシを捕つていた「ようちえん山」と呼んでいた森は、県の企業庁が開発を進め、巨大な工場が立ち並ぶ椎の森工業団地と名前を変えた。この工業団地は今もなお拡張工事中で、数十台のシヨベルカーが茶色の山肌を削り、ジブリ映画の多摩ニュータウン造成時の様子を描いた「平成狸合戦ぽんぽこ」のシーンを見ているような光景だ。昔一本で五十数匹のカブトムシが捕れた伝説のクヌギはどうなったのだろう。そして、その反対の山には巨大なソーラー発電のパネルが輝いている。よく釣りをした堰から流れ出る用水路では大きなシジミが採れたが、今は採れないらしい。つくづく、四半世紀の時の流れを感じる。



月日の流れは周囲の景色だけではなく、世の中の仕組みや人々の価値観をも変えつつある。先月発生した熊本地震もそうだが、人生観が変わるような数々の大きな災害に見舞われている。加えて、高度経済成長期からバブル期までの上げ下げの好景気から一転してバブル崩壊に始まる長引く不況。更には、携帯電話の普及、そしてスマホの一般化。

これらの変化の真つ只中に産声を上げ、幼少期から思春期を過ごした「ゆとり世代」がドラマ化されるなど今話題になっている。先日夜十一時頃から始まるニュース番組で、脱ゆとり教育が特集されており、どちらかというとゆとり世代をネガティブに映し出していた。特集の最後にゆとり世代と真ん中のある女性キヤスターが、男性メインキヤスターに、「ゆとり世代ってそんなにだめなんですかね」と、強い意志と目力を持って語りかけていた。「世代」でひとくくりにするのは抵抗感と、自分たち世代ならではの強みや良さも実感しているブランドがそうさせたのだろう。さすがの男性キヤスターもたじろぐほどの鋭さだつた。そのシーンで見せた女性キヤスターの芯の強さと美しい表情が今でも目に焼きつき離れない。その姿に、確かに学力の平均値は下がったのかもしれない。しかし、それを補ってなお余りあるものも持ち合わせているのだ。

完全に失敗だったという論調はいかなるものかと思われた。ふる里学舎蔵波にもゆとり世代の若者が多く在籍している。彼らは数多くある職場の中から佑啓会に魅力を感じ、福祉の門を叩いてくれた。それぞれに魅力がある。その彼らが、ありのままの自分に自信を持ち、お互いの良さを認識し、そしてその強みを發揮し、認め合い、高めあい、生き生きと仕事をし続けることが出来る、そんな職場を作っていきたい。それが利用される方の幸福に直結すると確信しているから。

教育だけでなく足元を見れば障害者を取り巻く制度や法律、環境も大きく変わった。放課後等デイサービス事業所の送迎車両が作る特別支援学校周辺の送迎渋滞。主要駅近辺に毎月のように開所する就労移行支援事業所。きれいにレイアウトされた広告やホームページによる営業活動。障害者雇用のビジネス化など、挙げればきりが無いほどの変化が進行中だ。賛否両論あるこのような変化に、自戒の念も込めて短く一言。時はうつろい、制度や仕組みが変わつても、人間の本质は変わつてはならない。目の前にいる人をいかに大切にするか。このことを常に考えよう。表面的な言葉上の問題ではない。指導でも訓練でも支援でも、あまり好きではないがサービスでもいい。そこに、人を大切にする気持ちが存在しているかが問題なのだ。(ふる里学舎蔵波 施設長)

懐かしい思い出

石川 美七子

先日、二十六歳の長男と写真の整理をしていると、「日光江戸村・来村記念」と書かれた一枚の大きな写真が出てきました。総勢五〇人の写真の右端に、まだ小学生と中学生だった息子二人、父、主人、私が写っています。

初めてふる里学舎を訪ねたのは、長男が養護学校小学部三年生の時でした。今のような放課後等デイサービスはなく、学校から帰宅すると、家にある物をかじったり壊したりと家族のストレスがピークに達し、困った私は思い切った相談に行きました。外作業のせいでしょうか、日に焼けた笑顔で親身になって話を聞いて下さったのは在原先生でした。学校の休日に長男を預かってもらうことになりました。

当日は長男と二人でふる里学舎へ行きました。在原先生と少しお話をした後、どうしたわけか私はなかなかその場所から離れる事が出来ませんでした。見兼ねた女性職員の方に「お母さんから先に離れて行きますよ」と言われ、ハッと我に返り「宜しくお願います」と頭を下げて、帰宅しました。とても懐かしきちよつと恥ずかしい思い出です。



日光江戸村へは、平成十四年八月十四日に療育等支援事業」という制度の登録者としての家族を対象とした一泊バス旅行で行きました。真っ白な麻のスーツに身を包みダンディな里見先生を中心に、ガイド役は軽妙でユーモア溢れるトークで車を盛り上げて下さった松橋先生でした。とても楽しい思い出です。



この旅行で私が印象に残った事は、日光猿軍団のお芝居でした。初めてのうちは猿の可愛らしい芸を笑って見ていましたが、厳しい言葉で叱責され、命令される猿の姿と、障害のある人達の姿が次第に重なって見え、全く笑えなくなってしまうました。ちよつと考えすぎだったかなと思いましたが：

あれから一〇年以上経ちますが、今でもふる里学舎には私達家族を支えていただいています。この四月からは次男が「ふる里学舎木更津」へ通っています。これからもどうぞ宜しくお願い致します。(ふる里学舎木更津保護者)

アメリカ紀行

松尾球太

あー、もう一年が過ぎたのか。ふる里学舎に就職以来、仕事を追っかけていると思う。いつの間にか仕事に追いつかれ、四月一日はあつという間にやってくる。今年も辞令交付式で二名の職員に海外旅行が理事長からプレゼントされた。「好きなところへ好きなだけ行ってきなさい」当人たち、まさかと感激の入り交じった表情で挨拶もしどころもどろ。昨年の私たちもそうでした。十三年というのは永年勤続になるのだろうか、どこでも、好きなだけといわれると逆に自粛しなければという気持ちとせつなくいたいたいこのチャンスと思う気持ちの葛藤。でも旅行の楽しみはどこに行くかより誰と行くかで決まる。連れは同期で、新人の頃から数々の武勇伝を残してきた間柄である熊澤主任。

「この際だ」と相談のうえ秋の週間アメリカ旅行に決定。行動を共にする約二〇名のツアー客の年配夫婦から「あなたたちも、卒業旅行なの？」アラフォーの男子二人は、スタートからいい気分であった。成田空港から九時間のフライトを経てラスベガスへ到着。添乗員の説明は私たちをさらに景気づけた。「お客様、ここは朝まで眠らない街です。明日の出発時間は早朝三時です。なので、寝ないでカジノにくり出しましょう。」

そこは世界一のエンターテインメントの街と言われるだけあり、今まで見たことのない

極彩色のネオンの数々。ホテルもそれぞれ個性を出そうと、なんでもありといった様相。自由の女神が建っていたり、エッフェル塔、凱旋門が建っていたりと、あたりを見渡していると「ここはどこなんだ」と茫然とさせられるのだった。何でもありなのは街を行く人たちの人種の多様さにもあった。日本の浅草とは訳が違う。おもしろいと感じたのは、世界中から来ている皆がとも自然にこの街に溶け込んでいくように見えたことだ。そこに特別な感覚はなく、統一感のない喧騒の中に何か共通の意識が通奏低音として響いているような感じだった。きっとそれは、皆が人種の壁を越えてこの街を楽しもうとする共通の思いを持っているからこそ産み出された街の音色だったのだろう。

福祉の現場では、虐待だ、差別だと騒がれている現状があるが、社会全体で共通の意識を持つて過ごす事が出来たなら、障害のある者もない者も変わらず一つの方向性を持つて、楽しく自然と融合できるようになるかもしれない。しばらく歩き、「ラスベガスに行ったらショーを見たい」と理事長に言われたのを思い出した。シルク・ドゥ・ソレイユのアクロバティックなサーカスショーは、今まで抱いたサーカスの概念を吹き飛ばして新世界を構築するほどの衝撃的な演舞だった。それはまったく別の言葉でなければ表せないと思う。しかし、それこそがシルク・ドゥ・ソレイユなのだ。興奮さめやらない内に、今

度はホテルのカジノでギャンブルに興じる事にした。ミニスカートのお姉さんが飲み物を運んでくると言う話も聞いていたので、ビールを飲みながら一攫千金の幻想を抱いていた。が、現実はその甘くはない。速く飲み物を出してしまおうと、短時間しか客が遊ばないので、時間稼ぎをされたらしい。おまけにカジノのルールも英語も理解できず、店員に散々怒られる始末。おかげでいつか勝てるだろうとどんだん賭けているといつの間にか数万円に。

とも夢中でカメラマンのように写真を撮った。その後はアンテロープキャニオン、ブライスキャニオン、そして最終日は世界遺産のグランドキャニオン。数十億年という果てしない時間によって形成された雄大な渓谷を目の前にして、時間が経つのも忘れ二人とも立ち尽くした。「どうだ世界は広いだろう」理事長の笑顔を思い浮かべながら自分たちの世間知らずを目の当たりにしたのだ。あんな貴重な体験は二度とあるのだろうか。



しかしアメリカはエンターテインメントだけじゃない。翌日からの大自然めぐりは別の一面を味わうことが出来た。こちらのほうが性に合っているのか妙に落ち着いた。ここでは金がかからないので安心でもある。バスで四〇〇キロを走行し、ザイオン国立公園へ向かう。車中、絶景に興奮している大学生のグループを見ながら、十四年前の卒業旅行に行ったころの自分と今の自分を照らし合わせていた。今自分には守るべき家族がいる。生きがいになっている職場がある。そこで一緒に働く仲間がいる。それを見ると、絶景を見るのに劣らないほど胸が熱くなるのだった。そんな思いに浸っている間に国立公園に到着した。映画の中ではない景色だ。二人

旅は自分自身を振り返る絶好の機会。日常を離れて改めて大切なものに気づく事も出来た。今年の二人も大切な何かを感じるのだろうか。「こんな環境で仕事ができるとは想像もつかなかった」一般の会社で仕事もしていた相方が言っていたのを今でもおぼえている。

(八千代市第二福祉作業所支援主任)

編集後記

新年度を迎え、木更津にも新たに六名の利用者の方が入りました。緊張した様子で作業を頑張っている初々しい姿を見てみると、私も初心に帰る頃張らなくては！という気持ちになります。

新年度になり、気が付けばあつという間に二ヶ月。初夏のさわやかな風と共に木更津から佐啓九十六号をお届けします。

上月 勇人

